魔法大陸ウィルアース

《那岐》

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法大陸ウィルアース

【Ｎコード】
Ｎ４０７９Ｇ

【作者名】
《那岐》

【あらすじ】
西暦２０１０年
若くして考古学者の頂点に立ち、武の道を極め文武両道な《相澤ゼツ》
その弟である《相澤セツ》は兄を誇りに思っていた。しかし……「この世界は遥か昔魔法が使えた」相澤ゼツのこの発言によりセツの運命は大きく動き出す。

前書き

前書き　この度小説を投稿させていただく《流》と申します。

まだ慣れないもので、誤字脱字とうあるかもしれませんがどうぞ最後までよろしくお願いします。

感想、批評、等あればよろしくお願いします。

それでは、精一杯書かせていただきますのでよろしくお願いします。

プロローグ

２０１０年
３月も終わりを迎えようとしているのに、人々はまだ肌寒さを感じていた。

夜の街は一層賑やかになる。眩しく輝くネオンは闇を切り裂く光。その光を僅かに遮る幾重もの高層ビル。

同じ場所とわかっていても朝とまるで違う景色に、全く別の世界にいるかのような錯覚におちいってしまう。

”男”はそんな世界の真ん中にいた。
今、自らが歩いている所は人の手が加えられたものしか存在しない場所……自然の無い場所。その”男”にはそれはあまりにも耐え難い苦痛だった。
しかし、だからと言って決して自然をこよなく愛しているわけでわない。純粋に今の世界を嫌悪しているだけなのだ。
この街を歩いている……いや、この世界にいる全ての人間を”男”は嫌う。
その心は憎悪と呼ぶに相応しかった。いつしか、この街を歩いている自らでさえも憎しみの対象と化していた。
”男”は街を歩いている人々を眺めるように見ている。
否。決して眺めているのではない。見下しているのだ。
３年の時を経て、ようやく期は熟した。”男”にとって、明日は待ち焦がれた日になる。いや、自らの手で待ち焦がれた日にするのだ。
ただ意味もなく歩いている人々を見ていると、自然と笑顔が零れる。明日起こる出来事を自分だけが知っている。

……明日という日が待ち遠しくて仕方がない。どうやら自分はまだまだ子供のようだなと、少し恥ずかしくなった。
不意に通行人と肩がぶつかる。明日の事ばかり考えていたから前をみていなかった。とんだ不注意だった。
「おい！！」
自分にとって大したことではない。通り過ぎようとしたとき、肩を掴まれ呼び止められた。
先ほどまでの笑みは消え、”男”　の顔は一気に不機嫌になる。
呼び止められて初めて男の顔を見る。実に愚かな顔、それが第一印象だった。
「いてぇなぁ、兄ちゃんよぉ」
その男には何人かのツレがいたらしく、気がつけば周りを囲まれていた。数は4、5人といった所か。
「……何か？」
”男”はその日初めての声をはっした。
「何か？　じゃねぇだろう？　俺にぶつかっておいて挨拶も無したぁいい度胸じゃねぇか？」
周りを囲っている仲間と思われる者達は笑っていた。
”男”も笑いたかった。この状況を俗に絡まれていると言うのだろう。だからこそ笑いたかった。この者達の愚かさに。

プロローグ2（前書き）

独り言ですが、
改ページの仕組みが分からず、無意味な所で部をわけてしまいました。
仕組みを理解しなければ……　笑

プロローグ2

「それは申し訳ありませんでした。　私も急いでいたものでして……でわ」

”男”は丁寧に頭を下げてその場を離れようとした。

人と関わるのは面倒だ。ましてや、相手をしてやる義理もない。

むしろ頭を下げた事に感謝をしてほしいと”男”は心でほくそ笑む。

「テメェ！　それで済むと思ってんのかぁ！？

こっちに来やがれ！　そのすかした面をぐしゃぐしゃにしてやらぁ！」

その言葉を聞いた時、遂に”男”は限界を迎えた。

「ぐしゃぐしゃですか？　……フフフ……ハハハハハハ」

最初は小さく、そして次の瞬間には高らかに笑っていた。

いつしか”男”は笑いを堪えることができなくなっていた。

周りからどよめきが立ち、それは怒りの声に変わっていく。

「テメェ！　何が可笑しいんだ！」

「フフフ……いや失敬。笑いを堪えきる事ができなくなりまして」

先ほどとはうってかわり、笑いながらいい加減な謝罪をする。

「……場所を変えましょうか。目立つのは好きでは無いので」

上等だと、男達はずらずらとついて行く。

まだその時では無いがまぁいいだろう。

”男”は決めていた。このクズ共には明日という重大な日の前イベントになって貰おうと。

”男”は、自分でも気づかないうちにまた笑っていた。

狭い路地裏へと入っていき、街の輝きのいき届かない場所に来ていた。
宛もなく、ただ歩いていると眼前に壁が立ちはだかる。
ここならばいいだろうと、”男”は壁に背を向け自ら逃げ場のない状況を作り上げた。
「ククク……オメェ馬鹿だろ？　自分で逃げ道をなくすなんてよぉ」
数にして6人程。既に”男”は完全に包囲されていた。
「安心してください。逃げるつもりなんてもともと無いですから……さて」
男は話に一段落をつけ、ゆっくり目を閉じる。
「何故貴様達を笑ったのか、教えてやろうか」
目を見開いた次の瞬間、”男”の口調は激変した。その変わりように男達は一瞬戸惑った。「実に貴様等が愚かだったからだよ。それに、ぐしゃぐしゃにする？　ふっ、生温いな。せめて殺すぐらいは言わねば――」
その瞬間、周りを囲んでいた男達の内の1人が突然全身を炎で包まれた。その炎は勢いと熱を増し、5秒と満たない間に男は言葉を発しないまま灰と化した。
対象物を燃やし尽くした炎はみるみるうちに小さくなり、その赤き姿を消した。
「……そう、こんな風に」
男達は突然の出来事に困惑した。いったい何が起こったのか。そもそも何故突然炎が舞い上がったのか。
意味も分からないまま仲間の死を目の当たりにし、男達恐怖で震えていた。
しかし、男達は分かった。根拠は無いし、直感がそう伝えている。目の前のあの”男”がやったのだと。
”男”はにたりと笑い次の犠牲者を探す。
明日が楽しみだ。

”男”は笑いながら余興の続きを楽しんだ。

～prelude～

清々しい朝の日差しを浴びて、沢山の生徒達が通学路を歩いている。

太陽の暖かな光のおかげで生徒達の眠気は吹き飛んでいた。

「ふぁあ～……ねむ」

……一人の生徒を除いて。

その生徒は大きな欠伸をして、眠たそうに登校していた。

悪くない顔立ちだが、寝ぼけ眼でもともと悪い目つきが更に細くなり人相を悪くし、他の生徒を寄せ付けない。

その生徒の名は”相澤セツ”

彼は眼をこすりながら通学路を歩いていた。

「お～い」

セツの後ろから声が聞こえる。誰が呼んでいるのか声で検討がついた。だから、セツは敢えて無視した。

「お～い！」

声はどんどん近づいてくる。しかし、セツは気にとめない。気にとめてしまえばロクな事にならないと知っているからだ。

ふいに鈍い音と同時に後頭部に痛みを感じた。

「がっ！！」

セツは突然の視界外からの痛みに声を上げてしまう。

「あたしがあなた如きに声をかけてやったのに、無視するなんて良い度胸ねぇ」

セツが振り替えるとそこには少女が堂々と立っていた。

茶色がかったショートヘアに整った綺麗な顔立ち。

背丈はセツの肩くらいと、小柄ながらもその堂々とした佇まいで存在感をあらわにする。

「いって～。チエ！！　お前なぁ……」　彩中（サイナカ）　智恵子（チエコ）は笑いな

がらセツの肩をバシバシと叩く。
「セツが無視するからでしょ？　そんな事より昨日の約束覚えてる？」
「昨日……さぁ。何か約束したか？　検討もつか……」
本当は覚えていたが、シラを切ろうとしたのだが智恵子は指を鳴らしながらゆっくり近づいてきた。
「あたし思い出す方法知ってるんだけど試す？　効くわよ～？」
身の危険を感じたセツから一筋の汗が流れ落ちた。
「まて！　今思い出した。今日の放課後、お前の買い物に付き合えばいいんだろ？」
セツにしてみれば忘れたい記憶だが昨日の出来事なので奇しくも忘れるにいたらなかった。　勝った方が勝者の言うことを何でも聞く、という内容で勝負をした。
勝負の内容は、牛丼特盛の早食い競争。一見女性の智恵子の方が不利に思えるのだが。
「くっそ～……その細身の体のどこに肉が入ってくんだよ？」
「フフン。ありがと。細いってのは最高の賛辞ね。それと、肉を食べる事に関しては誰にも負けないわよ」
セツは見事に負けてしまった。しかも食べきれず残してしまう始末。智恵子はもちろん完食。もはや勝負にすらなっていなかった。

「くそぉ！　次こそは負かしてやる！」
「ウフフ。セツの悔しそうな顔は蜜の味だわ」
今の智恵子にはセツが何を言っても負け犬の遠吠えにしか聞こえない。智恵子は勝者のみが味わえる優越感に浸っていた。
「よぉ！　朝から夫婦漫才ご苦労様」
ふと後ろから声が聞こえ振り向いた。
だが、二人に重要なのは呼ばれた事では無い。
「「誰が夫婦だ！」」
二人は見事に怒声のハーモニーを奏でて声の主を指摘した。

「うぉ！　息ピッタリじゃねぇ～か」
ケタケタと笑いながら男は二人に近付いてくる。
「どうせ昨日の話だろ？　しっかし、相澤もアホだよな。彩中に早食いで挑むなよ。」
人懐っこい笑顔が特徴的で早朝にもかかわらずその元気さはとどまる事を知らない。
「うるせ～よ慶太。……自信はあったんだよ。よく食べるって言っても女だと思ってな」
乾（イヌイ）　慶太（ケイタ）はやれやれと軽くため息をつく。
「ったく。俺は忠告したぜ？　まぁ、負けは負けだしな。
……で？　彩中は何をやらせるんだ？」
智恵子は笑いながら慶太に話す。
「今日セツに買い物に付き合ってもらうんだよ。乾君もくる？」
「いや、遠慮するよ。荷物持ちは一人居れば足りるだろ？」
そう言葉を漏らして笑いながらセツをチラリと見る。
「……何だよ？」
「別に？」
慶太はセツを含み笑いで見ていた。
「あっ、荷物持ちなら気にしなくていいよ。何なら乾君の買ったものもセツに持たせたら？」
セツは目を見開いて智恵子を睨みつけた。コイツは笑顔で何ふざけたことを言ってるんだ。
「あっ、マジ？　じゃあ御言葉に甘えて」
「甘えるな！！　何で俺が慶太の買った物まで持たなきゃならん！」
「敗者は勝者の言うことを何でも聞くんじゃないの？」
その言葉を振りかざされたらセツは弱かった。しぶしぶ頷くしかできなくなる。
今更ながらセツは智恵子に勝負を挑んだ自分に後悔していた。

「あっ、あたし、朝練あったんだ。ゴメン、先に行くね。」
手を合わせて軽く謝ると、智恵子は軽快に走り出した。
「くっそ～。チエのやつ。覚えてやがれよ」
智恵子の姿が見えなくなると同時に、セツは悪態をついた。
「ハハハ。まぁ、今日はおとなしく荷物持ちに徹しろよ。よろしくな、相澤君」
笑い飛ばす慶太を横目に、セツは深いため息をついた。
「でさ、話変わるんだけどさ。何でお前ら付き合わないの？」
慶太は興味津々でセツに質問する。
この質問は今日が初めてじゃないが、はぐらかされたり無視されたりと慶太は納得のいく答えを貰えて無いのだ。
「お前なぁ……何度目だよ。色恋話ばっかりしやがって、お前は思春期の高校生かよ」
「いや、高校生だけど……で、どうなんだよ？」　セツは再びため息をつく。今日はよくため息をつく……と、セツは心の中で苦笑いした。
「別にいつ聞かれても変わらねーよ。それに俺はアイツを恋愛感情で見たことがない。まぁ一緒にいて楽しいけどよ」
「ふ～ん。そんなもんかね？」
慶太は釈然としない返事をする。
慶太から見て、いや、他の生徒からしてもセツと智恵子の仲睦まじい姿はカップルのようなものだが、等の二人は交際を断固否定していた。
「さて、さっさと行こうぜ」
そして、いつもと変わらぬ日々。騒がしいだけの一日が今日も過ぎていく。

それをセツは疑う事は無かった。

～prelude～

「おい、チエ」
「ん～何？」
智恵子の返事は妙に明るかった。
「お前、知ってたろ？」
「え～？　なに～？　セツが言ってる意味わかんなーい」
智恵子の声は妙に棒読みだった。
「今日が特売セールだってよ！！」
セツの怒鳴り声が店の中に響き渡る。
その姿はまるで鬼の如し……と言いたいところだが、両手に沢山の荷物を持っているため、迫力に欠けていた。

授業が終わり一息ついたのも束の間、智恵子に首根っこを掴まれ有無を言わさずこの店に連れてこられた。
そして、気が付けば、大量の荷物を持たされていた。その勢いは衰えを知らず、止まる気配がない。
「ったく。　つくづく計画的な野郎だよお前は」
「アハハ、まぁつべこべ言わないの。敗者は黙って働きなさいな」
わかったよとため息をつき、セツは両手の荷物を持ち直す。
「……で？　やっぱりお前も来たんだな慶太」
背後からひょっこり顔を出して当たり前だろうと言った顔つきで対応する慶太。
「へへ、何か楽しそうだったからな。　まぁ荷物持ちを助けて欲しけりゃ言えよ。
明日学食奢れよ。　Aランチで手を打ってやる」
ニタニタと笑いながら隣で歩いている慶太。
「バカ、たけぇよ。　あんパンにしろ」
「いや、さすがにあんパンでは釣られないって」

「フフ、相変わらず2人とも仲いいよね」
2人の漫才のようなやり取りに笑いながら智恵子は言った。
その言葉はそっくり彩中にお返しするよと言いたかったが、その後が展開が安易に想像できたため慶太は思うだけにした。

「そういえば、セツ。　今日部活はどうしたんだよ。確か剣道部入ってたよな？　サボリか？」
「いや、出たいのはやまやま何だけどな……ほら、俺我流だからさ。　型を直すまで道場で竹刀を握らせて貰えないんだわ」
セツは慶太の発言であからさまに機嫌が悪くなった。
「ハハッ、成る程ね。そりゃ納得だわ。　だってお前竹刀を片手で振り回すとかどうよ？　ありゃ誰が見たって剣道じゃないし」
セツは剣道部に所属しているが、剣道部に入る前から兄に我流の剣の振るい方を体に叩き込まれた。　今は一人暮らしをしているため教わる事は無いものの体に叩き込まれた剣の振るい方は中々落ちない。　何分我流であるため自由に戦いすぎるのである。
「この前の試合は凄かったよね。相手が振り下ろした竹刀を手で受け止めて、相手の面横をガツーン！！　だもん」
その時の出来事を笑いながら身振り手振りで再現する智恵子。
それを見ながらセツの顔は見る見るひきつっていく。
「あの後顧問の先生に大目玉喰らってさ。　いや、悪いのは俺だけど仕方がないっていうか……」
「よしよし、けどあれはあれで格好良かったよ？」
ぶつくさと愚痴を零すセツを智恵子は宥めるように撫でていた。
「そりゃありがとよ。まぁ見てくれだけで誉めてくれるなら我が道突き進むんだけど、その見てくれを直せってどやされるんだからな。　努力はしてるけど……簡単に直るもんじゃないんだよ」

「まぁ、多少の癖位なら目をつむってくれるんだろうよ。　けどセツの場合は多少の限度を越えてるからな」

悪いとは思いつつ、やはり笑いが止まらない慶太。

「おい！！　お前、相澤セツだろ？」

ふいに後ろから声を掛けられ振り向く。　そこには見たことのない高校生が数人いた。

見た目からして不良といった感じでセツはため息をついた。

「知り合い？」

「いや、眉毛の無い知り合いはいない」

智恵子の問いにセツはしれっと答える。　まるでこの後の展開を見据えているように。

「間違い無さそうだな。てめぇ、ちょっとツラかせよ」

ほらな。また面倒くさい事になったな。セツはしかめっ面になった。

「断る。あいにく俺の顔は取り外し不可なんでな」

「ふざけてんじゃねぇよ！俺らを怒らせたいのか！」

「わかってるなら一々口に出すなよ。面倒くさい奴らだな」

セツは敢えて挑発的な態度で答える。

あちら側から手を出してきたら正当防衛が成立する。セツの頭の中は既に目の前の不良を返り討ちにする事でいっぱいだった。

「はぁ、セツと買い物してるといっつもコレだよね。セツ、ほどほどにしてあげなよ？」

智恵子もせっかくの買い物を台無しにされてうなだれるが、暴力は好まない。

それ以前にセツが勝つことを疑っていないかのような発言をした。

「了解。善処はするさ。慶太、荷物頼む」
「Aランチな」
セツは智恵子に適当な返事で返し、慶太に両手の荷物を頼む。
そして慶太もまた、セツの心配などしていなかった。
「だから高いよ。かけうどんな」
「おっ、あんパンよかマシだな。交渉成立で」
慶太はグッと親指をたてて上機嫌で荷物を持つ。
かけうどんでいいんだ……と、智恵子は思ったがつっこまなかった。

～prelude～

「さて、待たせたな。　そろそろ相手をしてやらないとな」

セツは不良達に向かって歩き出す。不良達は身構え各自持ち込んだ武器を取り出した。

手にはバットや鉄パイプ等、対人用にしては物騒なものがちらほらと見えた。

「まぁ待てよ。ここは店の中だぜ？　迷惑になるから場所を変えよう」

しかし、セツは臆さない。まるでその武器は相応の物であるかのように対応してみせる。

「あっ、俺たち見学希望だからいいよな？」

やはりセツの安否など気に留めない慶太。　喧嘩を見世物のように楽しみにしていた。

セツが勝つことを疑わない為か楽天的な発言をするが、それを信頼と呼ぶのかは定かではない。

「ちょっと、俺達ってあたしも？　男の子はいいかもだけど、あたしは喧嘩とか好きじゃないんだけど・・・」

「まぁまぁ、どうせ買い物も一通り終わっただろ？暇になるからちょっとだけ見て行こうぜ。

万が一セツが怪我したら後で介抱してやればいいんだし」

「ふぅ。それってホントに万が一だよね。　わかったわよ。　セツ？無理しちゃ駄目だからね？」

慶太の発案に振り回されながらも智恵子だけはセツの身を心配する。智恵子の優しさが垣間見えた。

「了解」

一言だけ言い残し、セツは不良達を誘導し始める。

「さてと、この辺でいいかな」

外に出てきた一行は広い場所へと移動する。
町は夕方時もあり人がたくさん歩いていたが、不良を避けるかのようにセツ達がいる場所から寄り付かなくなる。

「・・・で？何で俺にちょっかい出してきたわけ？」

周りを見渡し、人が殆どいなくなった事を確認して話し出す。
何にせよ今から喧嘩が始まるのだ。　ただでさえ通行人に迷惑がかかると言うのに、関係の無い人に怪我人まで出してしまったら申し訳が立たない。
「先週の事覚えてるか？　俺達の仲間をボコボコにしやがってよお！！今日はその仕返しに来てやったんだよ！」

「ん…あぁこの前のね。まぁ仲間意識が強いのは感心だが、あれはあんたらのお仲間が喧嘩吹っかけてきたんだが……正当防衛もいけないのか？」

何故か上からの目線な不良達に苛立ちを覚えたがぐっと堪えた。
セツは自ら手は出さない。いつも降りかかる火の粉を払うだけなの

だ。
セツ自信も喧嘩を好き好んでやっているわけではないのだから。
「へっ。まるで自分は悪くないみたいな物言いだな。『変人の弟』さんよぉ」
その言葉にセツは目の色を変えた。『それ』は振れてはならないこと、不良達は逆鱗に触れてしまったのだ。
「ちょっと！そんな言い方・・・」
「彩中、スットプだ」

智恵子はセツの幼馴染だ、もちろんセツの兄の事も良く知っている。故にその言葉の冷徹さがどれだけセツを傷つけるかわかっている。
横でカッとなった智恵子を宥めるかのように慶太は智恵子を止める。

「でも！！」

「彩中が言わなくても大丈夫だよ。今の言葉は俺もカチンと来たけど、それ以上にむかついてんのはあいつだろ？」

冷静に智恵子を宥めているつもりだったが慶太もまた、セツの兄には世話になっていた。知らぬ内に握り締めた拳はワナワナと震えている。
2人にとってセツの兄とは尊敬できる存在であり、憧れの存在でもあった。
『ある日』を堺にセツの兄は世間から罵倒される存在になった。
それでも2人にとって憧れの存在には変わりなかった。
だからこそ許せない。あの日からずいぶんと時が経つのに未だに馬鹿にしている存在が。
セツも同じ……否。それ以上の怒りをもっているのかもしれない。

「そういえば、この前の奴も兄貴を馬鹿にしてたな……」

「へぇ、それで？」

「だから病院送りにしてやったんだよ！！　さっさと来いよ。お前ら仲間なんだろ？
仲良く病院送りにしてやるからよ！！」

怒号を上げるセツを見て不良達は不適に笑っていた。

「威勢はいいな、だけど、これでもまだそんな事が言えるのか？
オイ！！お前ら！！」

その言葉と同時にたくさんの不良達が一斉に現れた。
あたりは不良、不良、不良。どこを見ても不良の姿しかない。
数にしておよそ４０人といったところか。

「嘘！！何この人数……こんなの反則じゃない！？」

周りを怖い形相の人間に囲まれて智恵子はたじろぐ。

「おいおい……これはさすがに不味いんじゃね？」

先ほどまで威勢のよかった慶太もセツの身を案じる。セツが常人以上の強さを持っている事を知っている二人からしてもこの人数では無傷というわけにいかないと感じた。そして自らの身の危険も感じていた。

「……で？こいつらが病院送りを希望してる奴らか？」

だが、セツだけは違った。自分の身の危険など知った事ではない。兄を馬鹿にされた。
だからこいつらを許せない、それだけだった。

「ハハっ言うじゃねぇか。やろうぜ、こいつらを嬲り殺してやれ！！女は後でかわいがってやればいい。なかなか上玉じゃないか？」

そう言って下品に笑い出す不良達、その言葉に智恵子は身震いをした。

「こいつらって、俺達もはいってるのかよ！？……ってかお前ら最低だな。あ～、なんか更にカチンときた。
セツ、加勢するわ。彩中、荷物頼む」

そう言って慶太は智恵子に荷物を渡し自分も戦闘態勢に入る。
セツほどでは無いが慶太もまた腕に自信があった。

「あたしに荷物持たせたんだから乾君学食のAランチよろしくね」

震えた声で智恵子は恐怖を紛らわす為冗談を言う。

「ハハッ。とりあえず冗談が言えるんだからまだギリギリ大丈夫だよな？」
「えっ？冗談じゃないよ？」
もちろん気を紛らわす為の冗談だが、その言葉に慶太は引きつった顔で止まる。　それは今から喧嘩に向かう男の顔ではなかった。

～prelude～（後書き）

まだ物語も始まったばかりでメインにも入っていませんが、
感想、批評をいただけると嬉しいです。
皆様の意見を通してこの駄文を改善していきたいので、何卒よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4079g/

魔法大陸ウィルアース

2010年10月8日23時07分発行